

国語（中）部会研究計画

I. 研究主題

思考・判断・表現の力を育てる授業の創造
～主体的・協働的に課題を達成する言語活動の工夫を通して～

II. 研究目的

1. 研究の経過

2012・2013年度は、研究主題を「国語を正確に理解し適切に伝える言語能力の育成～言語知識・技能の習得から活用を目指した指導の工夫～」とし、「基礎的基本的な知識及び技能の確実な習得」、「基礎的基本的な知識及び技能を活用するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力の育成」、「主体的に学習に取り組む態度の養成」の3つを柱とした研究を、教材を指定する形で行った。

2014・2015年度は前年度までの研究成果をさらに充実させるために、「生徒が生き生きと取り組み、確かな国語の力をつける授業の創造～すべての学習の基礎となる、豊かな言語感覚を育成するために～」の主題の下、先行実践の追実践にも取り組む形で研究を進めてきた。

2015年度の石教研第二次研究協議会では、3学年それぞれの公開授業のほか、指定教材について多くの実践を交流、協議することで、これまでの研究内容を深めることができた。また、分科会においては、理論研修会で学んだ言語活動研究の視点を生かして教材の共同研究を行い、視野を広げる良い機会となった。アンケートでも理論研修会や分科会での言語活動研究が非常に有意義だったという声が多く、言語活動研究の深化が授業改善につながるのではないかという手応えを得ることができた。言語活動ありきではなく、言語活動に振り回されるのでもなく、必要な力を身につけることができる意義ある言語活動を通して、生徒は「わかった」「できた」という楽しさを味わうことができる。そのためには教材研究と言語活動研究をしっかりと行い、授業をデザインしていくことが必要になる。このような課題が見つかることとなった。

2. 主題設定の理由

激しく変化する現代社会をたくましく生きていく生徒を育てるために、「何を知っているか」という個別の知識・技能、「知っていること、できることをどう使うか」という意味での思考力・判断力・表現力、「どのように社会・世界とかがわりより良い人生を送るか」という主体性・多様性・協働性が求められるようになってきている。その中で、私たちは「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視して授業を改善していく必要がある。また、学びの結果として「どのような力がついたのか」という視点も欠かすことができない。さらに、言語の教科である国語科としては、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる言葉の力を、言語活動を通して育成することが求められる。

それでは、どのような言語活動を位置づけることが効果的なのか。身につけるべき力を用いて、それらの力の使い方を考え、主体的あるいは協働的に活動することで達成できる学習活動とは、どのようなものなのか。

このような視点を持って授業をデザインすることが、確かな言葉の力を育てることにつながるはずである。

3. 研究仮説

習得させたい力を明確にし、主体的・協働的に取り組む言語活動を工夫した授業を構築することによって、確かな言葉の力（思考・判断・表現の力）を育てることができる。

III. 研究内容

1. 指定教材についての実践研究

(1) 言葉の力を育て、主体的に学ぶことができる言語活動を工夫する。

- ・生徒の実態を把握し、身につけさせたい力を明確にした上で、その力の育成に有効な言語活動を検討する。
- ・身につけさせたい力の育成を図るために必要な学習要素を、単元を通しての指導計画に適切に位置づける。
- ・単元を通して生徒がねらいとする力を身につけることができたか、見取ることを意識する。
- ・生徒自身にも活動を振り返らせて、身についた力を意識できるようにする。
- ・実践の成果と課題を明らかにする。

(2) 今年度は新教材のうち説明・記録文に重点的に取り組むこととし、次の教材を指定教材とする。

1年 「空を見上げて」（随筆）

「幻の魚は生きていた」（説明）

2年 「生物が記録する科学ーバイオロギングの可能性」（説明）

「科学はあなたの中にある」（論説）

3年 「作られた『物語』を超えて」（論説）

「誰かの代わりに」（論説）

2. 指定教材以外についての実践研究

- (1) 言語活動の工夫を行い、授業者の授業構想力を高める実践に取り組む。
- (2) 学習の基礎となる言語能力を高め、言語感覚を豊かにするための実践に取り組む。
- (3) 優れた教材の開発に取り組む。

3. 理論研究

国語教育を取り巻く現状や課題について学び、課題解決の方策の手がかりを得ることで、直面する課題に対応する教師の力を高める。

4. 教育課程研究

より効果的な教育課程の編成を目指して、必要な調査や資料収集、研究等を行う。

IV. 研究方法

1. 地域サークルでの研究推進

- (1) 各市町村単位で地域サークルを組織し、推進委員を中心に地域単位での共同研究を行う。
- (2) 「研究計画（内容）」を市町村単位で明確にし、研究主題解明に向けた研究実践を積み重ねる。
- (3) 成果と課題について、地域サークルで議論を行い、石教研第二次研究協議会に持ち寄る。

2. 石教研第二次研究協議会

- (1) 中心サークルによる公開授業と授業についての研究協議を行い、成果と課題を明らかにする。
- (2) レポート交流などを通して各市町村における共同研究の発表・交流を行う。

個人レポートについては研究内容の「1. 指定教材についての実践研究」を原則とするが、部会員の研究に資するものであれば「2. 指定教材以外についての実践研究」の内容も可とする。

- (3) その他の詳細については研究推進委員会において検討し、市町村の研究協議会や部会便りを通して全部会員の共通理解を図る。

3. 各種研修会

研究主題解明や指導技術向上のために、理論研修会と実技研修会を実施する。理論研修会は部会の研究主題解明に資する内容で、国語教育の喫緊の課題について、適切な講師を招いて行う。実技研修会は指導実務の技術向上に資する内容を原則として行う。どちらも詳細については研究推進委員会において検討する。

4. 部会情報「一語一会」の発行

日常実践の交流や研究資料の提供を行うため、事務局は年4回の部会情報発行を行う。

5. ホームページの更新

研究成果の発信や部会員の交流などのため、ホームページの更新・充実に努める。

6. 教育課程委員研修会

石教研第二次研究協議会での実践交流を踏まえ、教育課程編成・改訂のための資料整備に当たる。

V. 研究体制（組織）

1. 地域サークル

- (1) 推進委員を中心に研究の推進を図り、各学校の研究責任者とともに「学年別」の研究センター（授業者）を選出するなど、共同研究の体制を作る。
- (2) 授業公開をもとに、日頃の研究実践を交流し、主題の解明を図る。

2. 中心サークル

- (1) 中心サークルは石教研第二次研究協議会における会場（授業・全体）を受けもち、研究の視点に基づいて学年別を原則に授業を公開する。
- (2) 2016年度の中心サークルは「千歳」となる。次年度以降は恵庭→北広島→石狩→江別の順で進める。

3. 研究推進委員会

部会役員と各市町村推進委員で研究推進委員会を組織し、研究計画の具体化、研究成果の集約、石教研第二次研究協議会の運営等について研究協議する。部会役員は部長1、副部長1、事務局長1、事務局次長1、研究員1、教育課程委員3の8名とする。なお、研究の継続と深化を図るために、部会役員と各市町村推進委員の任期を原則2年とする。

VI. 年間計画

月	各種研究協議会・諸会議	役員会・推進委員会	具体的研究活動	その他の活動
4月	石教研第一次研究協議会 各市町村第一次研究協議会	本年度研究の提案・説明	研究計画に基づく個人研究の立案	
5月	研究推進委員研修会	具体的計画・準備	研究実践①	部会便り①発行
6月				部会便り②発行
7月	理論研修会	計画・準備・運営		
8月	研究推進委員研修会	計画・準備・運営		
9月	各市町村第二次研究協議会	計画・準備・運営	市町村サークルでの中間交流 研究実践②	部会便り③発行
10月	事前研修会 石教研第二次研究協議会	計画・準備・運営	研究成果と課題の全体交流	
11月	実技研修会	計画・準備・運営		
1月	研究推進委員研修会	本年度研究の総括 次年度計画策定		部会便り④発行
2月		次年度研究体制作り		
3月	各市町村第三次研究協議会			